

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第138号 2026年6月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 現代私的院生事情(4)～博士課程編③	猪股 大輝	2
コラム「大学教育の基盤」としての「新しい学生支援」	宮村 浩一	9
東京教育大学新聞会の「教室の素顔 分岐点に立つ学問」特集 －『教育大学新聞』第525号(昭和45年2月10日)中盤－	谷本 宗生	12
女子教育史散策・昭和戦時下編(87) 共立女子学園の場合 3	長本 裕子	16
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(26): 『一目瞭然東京遊学学校案内』(大正11年)(2)	吉野 剛弘	24
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(10) 嘉納塾における嘉納治五郎(その5)	富岡 勝	29
刊行要項(2026年2月15日現在)		31
短評・文献紹介 カシオ計算機株式会社「G-SHOCK『GA- VOI』誕生について」『DESIGN STORIES』を読んで(谷本宗 生)、雑誌『ビッグイシュー』特集記事「紙とデジタルを使い分 ける」を読んで(富岡勝)		32
会員消息 谷本宗生、猪股大輝、山本剛、富岡勝		33

コラム
現代私的院生事情(4)
～ 博士課程編③

いのまた だい き

猪股 大輝

(東洋大学)

2024年3月をもって東京大学大学院教育学研究科の博士課程を修了し東洋大学に職を得た。私の専門は教育史(生徒会活動を中心とした教科外活動の成立史)である。

先生方の温かいご指導や、運が向いたことなどもあり、標準修業年限(修士2年・博士3年)で博士論文提出まで進むことができた。ただし、年限内で修了した背景には、近年の大学院学生を取り巻く事情もある。コラムとして119号で修士課程、123号でD1、130号でD2の生活を取り扱った。今回は博士課程3年目を扱う。

1. 博士課程経済支援制度の落とし穴

近年、大学院生への経済支援制度は充実しつつある。119号でも触れた通り、博士課程において科研費と経済支援の両方を受け取ることのできる学振特別研究員(学振)DCを筆頭に、東大では国際卓越大学院教育プログラム(WINGS)、科学技術振興機構(JST)の次世代研究者挑戦的研究プログラム(SPRING)など、多数の選択肢が用意され、多くの博士課程在学の学生が、月20万程度と少額ながら経済支援を受けとることのできる状況が作られていた。私もD1の秋に学振DC2に採択され、D2、D3で科研費と経済支援の双方を得ていた。

こうした支援制度の拡充自体は喜ばしいことだが、落とし穴もある。1つは情報格差と業績競争早期化である。博士課程進学者が多い研究室(東大など)では、支援制度や申請方法などの情報が素早く、数多く出回るが、そうでない大学院では情報が回らずそもそも申請さえできないということがある。それでも近年では、SNS等で情報が周知され、広範に

申請がなされるようになりつつある。しかし、全体の予算規模は大きくは変わらないため、結果的に学振DCの採択率が著しく低下しているようで修士課程のうちから業績競争に駆り立てられるようになっている。

第二に、オーバードクターへの支援制度の不足である。上記のほとんどは博士課程の標準修業年限（3年）内の支援制度である。これ以降に人文社会系の若手研究者がまとまった金額を受け取ることのできる支援制度には学振PDや科研費の研究活動スタート支援があるが、前者は、博士号を持つことが条件、後者は常勤職につき研究者番号を取得する必要がある制度である。いずれもD4以上で研究を続けながら博士論文提出と就職を目指すいわゆるオーバードクターは申請できない。もし、ある程度安定した経済環境下で研究を継続したければ、博士論文提出や就職活動を早期化せざるをえない。

また、就職活動に関連して、教育学系の大学院生は大学の教職課程の非常勤講師等を担当して教育経験を積みつつ生活の糧を確保し、研究機関就職を目指すことが一般的である。しかし、一部大学では非常勤講師を含む教員の採用条件に博士号取得が要求されたり、あるいは博士課程を満期退学し学籍を抜いていることが求められたりする。博論提出が間に合わない中で、後者の例にあたる非常勤講師ポストを引き受けようとする、今度は博士課程所属大学の図書館を卒業生待遇でしか使えなくなって研究の不自由が生じたり、また、課程博士取得のための博論提出までのカウントダウンが始まってしまったりする。この点を回避するために無給であるが学籍を抜いた後も大学に籍を置ける特別研究員などのポストも研究室の状況によっては存在するが、これも博士号が条件になっているがほとんどである。

これらを踏まえると、現行の制度は様々な支援制度が充実したために、結果的に支援の要件となる業績やそれに続く博士論文の提出を心理的に急がせる設計となっている。こうした中で、博士論文は卒業論文、修士

論文と同様の扱いに近づいており、提出要件（日本学術会議協力学術研究団体加盟の学会誌への査読付き論文の掲載本数などが一般的に要件となる）を満たし次第提出するものへ変化しつつある感覚がある。

2. 博士課程3年目前半 ～ 怒涛の日々

私の大学院生活は以上の事情の中にあった。幸いD2修了時点で博論提出要件を満たしたこと、公募などを見据えるなるべく早めに博論を提出して博士課程を「修了見込」としたかったこと、D2の3月に指導教員の小玉重夫先生から勧められたこともあり（後からわかったことだがD3年度末で小玉先生も東大を少し早く退職されることになっていた）、結果的にD3の7月に向けて博論提出を目指して急ピッチで執筆することになったのであった。

思い返せば、このD3の4月から7月という期間は二度と繰り返したくないほど、様々に追いこまれた期間であった。D2から引き続き、東京大学教育学部附属中等教育学校と東京リゾート&スポーツ専門学校での非常勤講師を続けており、これらにより週に50分9コマ通年で授業を受け持っていた。特に東大附属の方は新科目「公共」を担当することになり、1から授業作りを進めた。さらに、4月には、D2時点で投稿していた日本教育学会『教育学研究』の「修正再査読」の結果が返ってきて、半月あまりで、急ピッチで修正した。これが終わると5月初旬に締切があった学振PDの申請書を作成し提出、次いでこれが終わる頃に『教育学研究』から、およそ「条件付」と思えないほどのコメントが盛り込まれた「条件付掲載可」の結果が返ってきて、なんとか対応した。結果的に『教育学研究』は掲載まで進み、査読コメントはどれも建設的なコメントで応答を通じて力がついたが、諸々の事情で期限が短く、何分骨が折れた。

そうこうするうちに東大附属の定期考査があつて短期間で採点業務に追われ、6月からなんとか本腰を入れて博論を書き始めた。公刊済論文

を博論の形に調整することと「はじめに」「おわりに」の書き下ろしに加え、集めておいた資料を使って丸々1章を新規作成した。この合間にも、6月に関わっている団体で全国の生徒会活動の優良事例を表彰する「日本生徒会大賞」で全国から高校生を集めた対面決選大会を東大で実施することになってこの企画を担い、更に、DC2の最終年であったので8月の渡米調査のための準備も進めた。結果的に平日休日問わず、ほぼ毎日大学に通い詰め終電まで作業する日々で、心身ともに疲弊した。支えてくれた家族や、休日に研究室まできて博論の校正に付き合ってくれた妻（当時は結婚していなかったが）には感謝してもしきれない。

ともかく、7月中に博論審査委員会を立ち上げられる提出期限の数日前にようやく最終的に完成させてなんとか博論を提出した。実質の執筆期間は1か月程度で、研究テーマを一貫させてきたのでなんとか形になったが、本来であればもう少し充実を図りたいところであった。

博論提出で一息つくまもなく非常勤先の成績付けなどに追い回されながらなんとか7月を終え、8月初旬にはアメリカのニューヨーク市に資料調査に向かった。コロンビア大学ティーチャーズカレッジやニューヨーク公共図書館、ニューヨーク州立大学ニューパルツ校で貴重な資料を得た。この時集めた資料が元になった論文は2026年3月に『日本特別活動学会紀要』に掲載されることになる。

3. 次年度の職探しの成功と博士課程の仕上げ

博論提出後から秋にかけて次年度の職探しを始めた。公募情報サイト(J-REC IN)を逐一確認していくつかに応募、9月から10月にかけて面接に呼ばれ、最終的に現任校の東洋大学文学部教育学科に採用が決まった。トントン拍子で決まったのはほとんど運であったが、学校教育に関するテーマ(特別活動史)を研究していて教職課程科目と適合性が高かったことは一助となったように思う。9月末には学振PDの結果が返

ってきたが、こちらは僅差で不採用であったので、もし拾っていただければ、翌年は非常勤講師で食いつなぐポスドク生活であった。

職探しと並行し、秋にはいくつかのことを進めた。9月には教育史学会で研究発表、次いで日本カリキュラム学会の『カリキュラム研究』に投稿した。また、英語業績も持っていたほうがよいとの小玉先生からのアドバイスから『東京大学教育学研究科紀要』にアメリカ課外活動論についての英語論文も投稿した。

10月には博論の口述試験があった。規定に従い、主査が小玉重夫先生、副査に所属コースである基礎教育学コースから2名（小国喜弘先生、山名淳先生）、コース外から2名（藤江康彦先生、村上祐介先生）に入っていた。近年の東大教育学研究科の口述試験はオンライン形式で、私からプレゼンした後、先生方から順番にコメントを頂く形で進んだ。様々な貴重な観点をいただきながら、全体としては問題なく進んだ。

更に、同時期に学部時代の恩師である湯川次義先生らと進めていた共同研究の成果をまとめ『早稲田大学史記要』にも論文を投稿したり、春学期には休みがちであったゼミに復帰したりした。小玉ゼミでは野見収氏を招いて同氏の著書『断絶としての教育学』（東京大学出版会）を検討するゼミでレジメを作成し、小国ゼミでは、小国先生が発刊された『戦後教育史』へのコメントレジメを作成したりした。こうしてまとめてみると、なかなか精力的だが、次年度の身分が確定し、博論も出し終わっていたので、春と比べればずいぶん気楽であった。

院生生活最終盤であるD3の12月から2月に力を入れたのは、東京大学教育学部附属中等教育学校での研究授業であった。3年間の講師生活の集大成として、担当していた「公共」の授業で「水俣病」を題材とした探究学習を設計することにした。水俣病学習史を専門とし、所属研究室は異なるが東大大学院の後輩であった佐野良介さんに手伝ってもらい、研究倫理審査を受け、12月の定期考査後から2月にかけて、教材

作成・全授業の録画・毎回の授業の検討を行った。まとめ回では数回ほど、小玉先生にも見学に来ていただいた。教育学徒として実践に向き合う大変貴重な機会であり、その後の教職課程の授業を担当するうえでも大きな糧となった。こうして、研究と実践双方に自分なりに必死に取り組んだ博士課程生活が終わった。

4. 院生生活をふり返って

これまで書いてきたように、現代の院生は一頃と比べれば恵まれた環境にある。支援体制は充実し経済支援を受けることのできる院生が増えた。厳しかったと聞く研究室の議論文化も相応に穏やかになった。各学会での査読改革も進み、なるべく建設的なコメントを出し論文を掲載しようという方向性が示されるようになってきた。

一方で、支援獲得競争が広まり、このために業績を早く出せというプレッシャーが高まった。競争ムードの中で周囲と自己を比較してしまうことが多くなり、常に薄氷の上を、足元を固めるインプットも無いまま走りつつ考えることを常に強要される感覚があった。

私は標準修業年限内の5年間で院生生活を終えることができたが、これはたまたま諸々に恵まれたからに過ぎない。先生方のおおらかなご指導があり、研究テーマや史資料との出会いに恵まれ、学振DC2の研究支援を受け取ることができ、査読では建設的なコメントばかりであり、何より家族の得難いサポートがあった。ここまでのことが積み重なってようやく5年での修了が可能となったのであり、このことが標準的に求められる今日の支援制度のあり方は、多くの困難を孕んでいると言えよう。

また、このように恵まれた中でも、院生時分には、将来への大きな不安を抱え、あれもこれもと多数の作業や締切を抱え、飲み会にいく余裕さえ1か月前から調整しないとほとんど取れないような日々が続いた。職を得てからのほうが、学科の先生方のご配慮もあって作業量が減り、本来

院生の中でやっておくべきインプットに使える時間が長くなったといっ
てよい。本来様々に関心を広げながら研究テーマにより深く向き合い得る
院生生活を上記のように進めてしまったことが良いことであったかとい
うと、いささか疑問も残る。

(終)

コラム

「大学教育の基盤」としての 「新しい学生支援」

みやむら こういち

宮村 浩一

(大学キャンパスコンサルタント)

はじめまして宮村浩一と申します。1983年に大学卒業後、長らく大学生協で仕事をしてきました。2005年からは、大学と生協が協力をして「学生の学びや体験を支援する事業」を創造し普及する仕事に関わってきました。

■「学生支援」の在り方の変化

課外活動の分野では、80年代初め頃迄は「厚生補導」という用語が使われていましたが、90年代には、「学生支援」や「学生サービス」という用語が使われるようになりました。

これは、学生を管理・指導する対象から、学生の主体性を尊重しそれを支援する、また学生にサービスを提供する対象と考える様に変化してきたのだと思っています。

さらに、2000年代以降は、国立大学の法人化や少子化の進展、グローバル化、ICTの活用など社会の大きな変化で、学生生活や教育内容も変化して「準正課」と呼ばれる分野が注目されるようになりました。そこで大学生協では、大学の英語学習とは違う形で、異文化の理解や国際コミュニケーション力の習得を行い、1年生の夏休みには「異文化体験ツアー」で海外体験をする場をつくり、大学によっては単位の認定や参加費補助を行う様になっています。また海外でのインターシップ体験の場の設定も支援してきました。地元の地域企業や団体との関係では、PBL型の取り組みやキャリア教育を取り入れた年間の講座を提供しました。また先輩学生が後輩学生に教えるPC講座や、大学オープンキャンパス対応、入学時の新入生・保護者の生活準備対応などを「学内インター

ンシップ型」で運営し、ノウハウを蓄積してきました。就職対応では、大学生協独自のノウハウで「公務員試験対策講座」を全国50大学以上で運営しています。多くは大学との共催で、専属の生協職員を配置して1年間の学習に寄り添い成果を上げています。

■今後の「新しい学生支援」は、「大学教育の基盤」となる

私は、今後の「新しい学生支援」は、これまでの「正課」「準正課」「課外」区分ではなく、学生の学びと成長を支援する「大学教育の基盤」として位置付けられるようになって考えています。AI活用はじめ、時間と空間の概念もさらに変化し、大学と社会の結びつきもさらに深まると思うからです。これらを実現するために、以下の3点がポイントになると私は考えます。

●第一に、学生の学びは、教室・研究室だけでなく「AI活用やネット空間での情報」にひろがるでしょう。であるからこそ、「リアル体験」がさらに重要になると思います。これまでは理論を学びその後実習に出るサイクルでしたが、今の学生は、「リアル体験」をすることで、学ぶことの意味や意欲をもち理論的学びにも立ち返るのです。

●第二に、大学全体が「自由な交流を促進する混ぜるコミュニティ」になることが重要だと考えています。大学構成員（学生・院生・留学生・教職員・その他関係者）はもとより学外の様々なステークホルダー（地域住民・行政・企業・卒業生・保護者等）まで視野を広げて、リアルな体験・交流の場を意識的に設定することが大切だと思います。そのことで「異分野」から「異文化」から「異世代」から学ぶ新時代の学びにつながると思います。

●第三に、様々な体験の場の設定だけではなく、「その体験から、自らを振り返り、学びを深める」ことを支援出来るスタッフが多数必要です。まずは、大学職員や生協職員が、そのような機能を果たせるように専門

性育成することが大切ですが、本質的には、大学職員全員が「人間の学びや成長を支援する」考え方と行動を身に着けることが重要だと思います。そのことで、本来の意味での「学生を中心とする大学づくり」に近づくとともに、大学スタッフ自身の役割の自覚と成長につながると思うからです。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

東京教育大学新聞会の「教室の素顔 分岐点に立つ学問」特集

—『教育大学新聞』第525号(昭和45年2月10日)中盤—

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

このニューズレター137号で、『教育大学新聞』525号(1970年2月)に掲載された特集記事「教室の素顔 分岐点に立つ学問」について、前半にあたる文学部と理学部について抜粋紹介した。本稿のNL138号では、これに続く中盤にあたる理学部と農学部について紹介したい。紙面の都合上、後半にあたる体育学部と光学研究所などの紹介については、次号以降とする。

理学部:筑波新大学にかける 理教授会は移転推進の拠点であるし、移転に伴う大学の変貌が最も象徴的に表現されたのがこの学部かもしれない。それは従来の基礎研究を中心としたアカデミックな学風から一層産業界に要請されている(売れっ子の)応用研究、技術教育の重視への転換である。教授会が移転推進を強行するのとうらはらに、学生内部の移転反対の動きも小さくない。

数学:諸科学の基礎として [略]

応用数理:技術者養成でなく研究者養成を [略]

物理学:優秀な教官明るい雰囲気 教育大で一番有名な専攻がこの物理学である。学長が続々と物理学教授から出ている。ノーベル賞の朝永振一郎は60年安保のときの学長だった。そして教育大闘争の発火点ともなった学長選挙で選ばれた三輪光雄、彼は学長室はおろかキャンパス内に一步も足を踏み込まないで「紛争」の責任をとって辞めた。その後釜に、同じく責任をとって評議員から学長代行に昇格した宮島龍興。彼はこの一年間罪惡の限りを尽してこのたび学長にまた昇格する予定だ。そしてこの宮島を陰であやつる黒幕が福田信之。実力NO1、ミスター教育大。ニックネームはヘルツといいドイツでもドクター・ヘルツで通るというから相当バカにされているのではないかと思われる。オストラシズ

ムが教育大でも行なわれれば、絶対確実に追放される人物の筆頭だ。教授はこの宮島龍興、福田信之らの他に一流の右翼文化人になったと噂される小西文学部教授と共に筑波大学創設のための海外視察に行くことになっている三雲昂、宮本米二らがいる。

応用物理:「理論」の強力なバックアップとして [略]

化学:実験とクラスづくりに [略]

動物学:境界領域に人気 [略]

植物学:生命の神秘への挑戦 [略]

地理学:特殊科学から総合科学へ [略]

地質鉱物学:「民主的」な教室運営 地質鉱物学専攻は理学部北側の一階と地階に研究室をならべ廊下の両側におかれた岩石標本、化石類が一目でそれと感じさせる。教授陣は八名で、岩石学、構造地質学の牛来正夫、古生物学、地史学の大森昌衛、地質調査法の藤田至則、鉱物学・層位学の渡部景隆、解析鉱物学・反応学の須藤俊男、鉱床学の宮沢俊彌、地史学の橋本旦がいる。移転推進勢力の強い理学部でもこの専攻は比較的批判的態度をとる教官が多く、学生との結びつきも理学部では最も良い。筑波闘争の中で、同教室の雨宮委員長が処分された時にはクラスに対策委をおき、積極的に法廷での処分撤回闘争を闘い今日に至っている。アポロ十一号の成果はいち早くこの教室に伝えられ、旧来の地球物理学、鉱物学に修正が加えられている。そして今までの地味な岩石採集から一躍脚光をあびつつある学問へ脱皮している。

農学部:前身は農業教育専門学校であったが全国で数少ない林学科を擁しており、総合的な農学部になっている。とくに農業の性格上、物理、化学、工学との関係、あるいは、社会科学との関係が密接である。農学部は大塚から離れているため、一部教育など不便だが、学部祭など家族的な雰囲気が濃厚である。

農学:化学、物理学の知識も [略]

農業化学:生産物加工利用の基礎理論 [略]

農業工学：土地改良事業の一環を研究 [略]

林学：演習林での生活 林学科は、森林について、政治・経済・地理・地質・動物・植物・工学などのあらゆる面から研究していく、農学部には数少ない「総合科学」の一つである。だから山の中にももって森林の調査するようなことを「林学」というイメージから受けるが、先の様に多方面からアプローチする科学である、一度山に入るとあらゆる教室で学んだ知識が応用できる。森林にいる動植物、山の気象、治水林学を中心とする会計、そして木材のことなど…。また林業政策、それを通じて歴史、地理という具合である。長野県野辺山、静岡県系川などの付属演習林で卒業まで七、八回の実習があり、一週間泊り込みで教授陣からシゴかれる。講座は四つで、造林学では、陣内巖教授を中心に森林を作り育てる研究、和木砂防学では、藤井真一教授を中心に治山治水・森林利用の研究、森林経営学では、篠崎哲教授を中心に林業経営に必要な技術の研究、林政学では、山本光教授を中心に林業の歴史、地理林業政策等の研究が進められている。この科の学生は、山奥での林学実習にたえるだけの体力とねばりが要求されるので、そのせいか一般に物事に動じない大陸的性格の持ち主が多い。女性は原則として敬遠されるそう。夏休みには、実習の成果を生かして営林署などでアルバイトをする学生も多い。クラス活動も盛んで、週に一度自主ゼミナールが開かれている。就職先は、営林（国有林関係が主）、一般会社、県庁などが多いが、教員にもなるものもある。

木材工学：合板・積層材の製造理論 [略]

農村経済：農村社会の全面的研究 [略]

生物化学工学：農業と化学工業とのかけ橋 生物化学工学という学問の歴史はまだ新しく、約二〇年と言われる。科学の高度な発展は必然的に専門の細分化と、基礎科学の融合を不可欠とする、この学問もそうした必要性から誕生し、近年その学問的意義が広く認められつつあり、現代科学の花形的存在になりつつある。教育大に同名の学科が発足したのは六年前で、国内唯一の科である。本学科の主眼は、発酵ないし応用微生物産業を化学工学の一分野として把握

する事にある。従って農学部の一学科という印象は極めて薄く、むしろ工学的な印象が強い。他の学科に比して基礎科目や関連専門科目等の必須履修科目が多く、教職を取ることは極めて困難である。講座は四講座で、工業生物学教室（阿部又三教授、田淵武士助教授）、化工単位操作教室（小林次郎教授、吉留浩助教授）、培養工学教室（上田清基教授、高橋穰二助教授）、反応工学教室（宮崎安太郎教授、戸田清助教授）である。また学部付属の木材糖化研究所（所長・小林達吉教授）も本学科と密接な関係がある。本学科の卒業生の進路は明るく、今年の卒業生の場合は、大学院進学八名、他就職希望者全員就職でしかもすべてが春に決ってしまう売れ行きである。就職は、医薬、高分子化学、工業プラント設計、微生物関係方面が多いようである。

上述の理学部を紹介する合間で、「受験生メモ」として「交通機関・暖房状況」が記されていて、なかなか興味深い。まず東京教育大学の受験生に対しては、事前の入試会場へのアクセス確認をすすめている。さらに都外からの受験生を意識してか、「交通機関は文理教の大塚は地下鉄茗荷谷駅がもっとも便利。バスもあるが、時間がかかる。地下鉄（池袋－茗荷谷）三〇円。バス（池袋よりスクールバス）十五円、茗荷谷に限らず帰りの出口はこみあうので、来たときに帰りのキップを買っておくのもよい」とし、また「各会場ともストーブの設備はあるが火は入れないので、オーバー等の防寒具の用意が必要、オーバーの着用は許されている」と補足助言している。

女子教育史散策・昭和戦時下編(87)

共立女子学園の場合3

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

『ニューズレター』第137号で、共立女子職業学校の明治後期について述べた。引き続き、大正期の様子を『共立女子学園百年史』『共立女子学園百三十年史』などを参考に述べよう。

創立以来の役員であった、永井久一郎の死去や手島精一の辞任に伴い、大正5(1916)年4月、宮川保全が第五代校長に、鳩山春子が校長補に就任し、宮川・鳩山を中心とする時代へ移行する。

明治期に引き続いて、生徒製品の天覧、国内の展覧会、外国での万国博覧会への出品は続き、高い評価を得た。外国の博覧会出品は、文部省からの要請で、一旦文部省内に陳列され関係員が一覧した後、同省によって荷造り発送された。短い製作期間でそれぞれの係が大奮闘して製作にあたった。

大正時代の高等師範科の授業

大正5年に高等師範科に入学した波多江穂野が、学生時代を回顧して寄せた文章から、大正時代の授業の様子を概略しよう。

1年生の時は、2階北側隅の小さい部屋で80名ほどの学生は半数に分かれ、午前、午後交代で裁縫を学んだ。2年生になって2階の広い教室を使用し、3年生と交代で、和裁、洋裁を学んだ。作成した作品は、1年時の裁縫は、本裁単衣ほんだちひとえ(女物、男物)、本裁袷あわせ(女物、男物)、女袴おんなばかまなど。2年時は、袷羽織あわせ(本裁男物、女物)、単衣羽織ひとえ(本裁男物、女物)、子供の被布ひふなど。3年時は、男単袴ひとえ(褌有、褌無)、女物袷本比翼まちなし、袷あわせ比翼ほんびよく、袷あわせ縮尺二分の一うちぎなど。洋裁は、シュミーズ、ペチコート、セーラー服上下ふくさ(縮尺二分の一)など。袋物は、名刺入れ、懐紙入れ、袱紗ふくさなどである。裁縫も洋裁も、男物、女物、子供用など、下着や装着に付随する小物まで作っていた。

始業時間は、夏は午前8時、冬は午前8時30分、毎日7時間授業、10分の休憩時間はあったが、学生はほとんど席を離れず、針を運んだ。刺繍教室に移動すると早速台に向かって刺繍を始めた。時には、体育の先生がまわってきて、机と机の間で手の上げ下げ、首を回す程度の体操をした。学科以外は毎日明けても暮れても実技に励まなければ間に合わなかった。

3階の講堂で宮川校長の経済問題や物価問題などの講演を聞いた。鳩山校長補は婦人の使命、我が子の教育、模範家庭など婦人の徳について話した。毎年5月、生徒製品作品展覧会が行われた。室内装飾を上級生とともに凝らし、作品の展示をし、衣服の変遷などを書いて壁に貼った。当日は廊下側から窓越しに、造花、刺繍、編物、ミシンかけなどの授業風景を来校者が観覧した。バザーは講堂で、天覧品のうち、上納されない品を含め、細工もの、前掛けなどを作り並べた。

高等師範科は、卒業すると無試験検定で、裁縫並びに手芸科の内一科目の師範学校、中学校、高等女学校教員の免許状が授与されることになっていた。3月には検定委員が来校し、決められた時間内に、実技の試験（裁縫男袴羽織、刺繍松に鶴、洋裁シュミーズ）が行われた。高等師範科には、文部省からの委託生が10名ほど入学し、すでに教員をしていた人もいた。卒業後はほとんどが女学校教師として全国各地に就職し、数年後家庭人になるというコースを歩んだ。

波多江は卒業と同時に助手として母校に残った。途中他校に転出したが、大正11（1922）年以来昭和48（1973）年まで学園に勤めた。高等師範科は実に充実した3年間だったと振り返っている。⁽¹⁾

寄宿舍、校舎の増築・新築

大正4（1915）年ごろ生徒数は1,500名を超えるようになり、寄宿舍の増築の必要が生まれた。第一次世界大戦勃発により、隣接するドイツ東亜協会が所有する土地（神田区今川小路8番地）476坪と家屋を売却することになった。それを2万8,000円で購入し、寄宿舍を拡張し、割烹科及び洗濯染色科の教室を

建設することになった。これにより旧寄宿舎と合わせて200名を収容できるようになった。しかし、在校生1,500名に比べると少なく、300名は収容できなければ地方出身生徒の入寮希望を満たすことはできない。そこで宮川は大正5年6月、同窓会で寄宿舎の増築の必要性を訴えた。その概要は、“…現在の総生徒数は1,514名で、四分の三が地方人で、寄宿を必要とする人々である。創立以来現在までの総卒業生は、本科、割烹科と洗濯色染科等を合算すると5,747名である。私は今後10年間に1万人の卒業生としたい。さらに5,000人の卒業生を見るためには、現在の学生を2,000人収容しなければならない。そのために漸次校舎を改築したい。”⁽²⁾で、将来設計とともに校舎改築の必要性を訴え、卒業生の協力を求めた。同窓会はこの要請に応じて募金活動を始めた。

大正6(1917)年7月起工し、同年11月末、長さ三十三間、幅五間半の大建築と付属の二棟が完成し、翌年1月より使用した。また、同年11月、節子皇后より校舎増築の補助として3,000円が下賜された。

舎監の小杉くらが同窓会誌『桜之友』第25号に「寄宿舎だより」を寄せた。

…当舎地面の総坪数九百二坪余、建坪は平坪に述べれば、七百三十坪に近く、之を中寮北寮西寮南寮に分ち、中に舎監室一、事務室一、生徒室五十八、応接室一、休養室一、作法室一、浴室一、食堂三、洗面所三、下婢室一あり。門衛所及巡查宿所さへ設けられ、舎生三百安堵して其の業を励み居り候。後略(『共立女子学園百年史』264頁)

また、舎監の菊地くにの報告⁽³⁾により、増築されて設備の整った寄宿舎で、作法や生花の稽古も行われ、当番制の食事作り、体操、大掃除、入浴の様子、時には余興や模擬店などを出し、親睦会が行われるなど和気藹々とした寮生活の様子が窺われる。

宮川保全の死去、関東大震災

大正11(1922)年11月24日、共立女子職業学校創設の主唱者であり、幹事として長年校務に携わり、大正5年4月から校長を務めていた宮川保全が死

去した。宮川は校長就任以来、寄宿舎の拡張、割烹科・洗濯色染科教室の新築を行い、大正10年にはさらに第四期拡張計画を発表し、同窓会で協力を呼びかけていた。大正11年3月に腎臓炎と診断され、静養に努め小康を得て、同年10月30日には学制発布五十年祝典に出席し、満40年以上の勤続教育者として記念品を授けられ、さらに東京市教育会で表彰された。しかし、その直後に病気が再発し、11月24日危篤に陥り、大学病院で死去した。同年12月、鳩山春子が第六代校長に就任した。

宮川を失ったが、校舎・寄宿舎も整い、鳩山校長の元、充実した学校生活が営まれていた。しかし、大正12(1923)年9月1日正午前突如起こった地震によって、共立女子職業学校は、校舎・寄宿舎の焼滅、教職員・生徒の死亡者74名もの犠牲者を出した。夏休みは他校より10日ほど短く、9月1日はすでに授業が始まっていた。土曜日だったので授業は午前11時に終わり、寄宿舎には200名を超える寄宿生がいた。

舎監平山高の手記によると、

…初めは往来の自動車に家の揺ぐ程度の上下動を感じました。上下動の危い事をよく聞かされてみたため、直に「地震ですよ」と叫び廊下へ駆け出る瞬間、一大音響とともに家屋は倒潰し、舎中一同其下になつたのでございます。…頭を上げて見ましたら、丁度硝子窓の破れたのを被って居ました。それでそこから頭を出して、窓や硝子を除いて、側に居て出られない人の手を引き、瓦や板を除いて、だんだんと姿の見ゆるかぎり、声の聞こゆる限り、助け出すうち、はや西の方には火が起り、折悪しく風下なので煙に攻められ、火の子^{ママ}を浴びました。…幸ひ無事に風呂場の屋根を通つて、大正堂の露地からお堀端の道路へ出ました。それから振り返つてみますともう火が随分燃え広がつて、舎生の逃げる姿は見えません。後略

(『共立女子学園百年史』294・295頁)

このような状況であった。なんとか逃げ延びた生徒たちは、文部省やフランス大使館に避難し、最終的には近衛師団第二聯隊のお世話になる。この地震で舎監

の小杉からはじめ教員4名、寄宿生68名、女中と門衛の家族などが亡くなった。東京の学校の中で最も多くの犠牲者を出した。

復興

罹災の翌日、鳩山校長、大久保幹事以下職員総出で焼け跡の始末や生存者の救護にあたった。9月10日、校舎の焼け跡に掘建て小屋を作り、仮事務所を設け対策を協議した。東京では多くの学校が焼失し、1,600名もの生徒を収容できる校舎を借りることは難しかったが、幸いにも、小石川丸山町（現文京区千石三丁目）の東洋高等女学校が深く同情し、同校の授業を午前中で終わらせ、午後は校舎の全部を共立女子職業学校に貸してくれたのである。そして、10月15日から短縮授業を開始した。寄宿舎には小石川区にある稱名寺や寂圓寺という寺を借りた。

しかし、12月20日、東洋高等女学校が失火のため校舎の大部分を焼失してしまった。とりあえず、翌日から臨時休業として、そのまま冬期休暇に入った。休暇の間に新しい校舎を探さなければならなかった。幸いにも監事の小西信八が校長をしていた東京聾啞学校が校舎の使用を許可してくれた。三学期は乙部の生徒全体がここに移った。

従来通りに生徒を収容するには二階建バラックで25万円を必要とする見込みであった。第二次校舎拡張のために積み立てていた資金、同窓会の寄付金を加えても10万円ほどで、建築費だけでも15万円不足であった。他にも機械、器具等の設備費も必要である。10月の商議委員会で、約15万円を借入れ、寄付金5万円を集めることに決議した。

この時鳩山は、復興のために渾身の力を注いだ。大蔵省から低利資金を借出し、寄付金を募集し、自身も多額の出金をした。寄付金集めのために、東奔西走し、熱心に説明し、勧誘した。これに応じて、同窓会も立ち上がった。復興資金10万円を寄付する目標を立てて会員からの寄付金を募集した。地方の卒業生たちが演奏会やバザーを催してその収益金を寄贈した。ニューヨークやカリフォ

ルニア州在住の卒業生団体からも寄付金を送ってきた。商議員や元職員らも多額の寄贈をした。こうして、大正13(1924)年1月工事が始まり、3月16日には新しい校舎に移転できた。「どんなバラックでもよい、自分の学校が欲しい」が、他校に間借りをしている間、職員・生徒の唱えていた言葉であった。罹災から約半年、それが実現した。職員の奔走もさることながら同窓生の母校愛が大きな実を結んだ。同月22日、旧校舎の所在地一ツ橋で、仮校舎の大広間の新しい畳に座って卒業式を挙行了した。

専門学部設置

大正13年11月29日、共立女子職業学校は文部大臣宛、高等師範科を「専門学校令」に基づく専門学部への昇格の認可申請を行った。翌14年3月10日付で認可を得、同年4月から専門学部が発足した。そして卒業生に対する中等教員無試験検定も同年6月1日付で認可を得た。

明治44(1911)年4月に高等師範科(修業年限3年)を設置し、同科卒業生は裁縫・手芸の中等教員無試験検定の特典を付与された。以来14年間で685名の卒業生を出し、また、第六臨時教員養成所から生徒の委託を受けるなど中等教員養成機関として貢献してきた。しかし、「…時代の進運に伴ひ、内容を充実し、一層教員養成機関としての実績を挙ぐべき必要を認め候に付…」⁽⁴⁾と申請の理由が記されている。申請書に添えた調書の第一項目、〔目的〕は「女子に必要な専門の知識技能を授け中等学校教員たらしめんとする者を養成するを以て目的とす」⁽⁵⁾と述べている。修業年限は3カ年。生徒定員は400名。同年5月20日、文部大臣は共立女子職業学校長鳩山春子の専門学部長兼務を認可した。

大正9(1920)年7月6日公布された「高等女学校令中改正」(勅令第百九十九号)で、「高等女学校ニ於テハ高等科、専攻科又ハ補習科ヲ置クコトヲ得」(第十条ノ二)、「高等科及専攻科ノ修業年限ハ二箇年又ハ三箇年トス」(第十条ノ四)と示された。専攻科と補習科については明治32(1899)年2月8日公

布の「高等女学校令」(勅令第三十一号)において設置を認められていたが、このたび、女子高等学校の制度を設けない代わりに、高等女学校の上に立つ3年制の高等科を設けることができるようになった。これを機に広島県立広島高等女学校家事補習専攻科や、宮城県第二高等女学校高等科など公私立の高等女学校では高等科・専攻科の併設が進んだ。そして一定要件を満たせばその卒業生に中等教員無試験検定が認可されることになっていく。⁽⁶⁾帝国婦人協会実践女学校高等女学部のようにすでに高等科・専攻科を設置している高等女学校では専門学校へ昇格する動きも活発になった。⁽⁷⁾また、福岡県立女子専門学校(大正12年4月開校)や大阪府女子専門学校(大正13年4月開校)など府県立の女子専門学校の開校も相次いだ。⁽⁸⁾高等女学校で学ぶ女子が多くなり、さらに高等教育を受けようとする女子の増加があった。

こうした「時代の進運に伴い」共立女子職業学校では高等師範科を「専門学校令」に基づく専門学部昇格させる必要があった。そして共立女子専門学部は、3年後には共立女子専門学校に再編される。

共立女子職業学校本科、専攻科、受験科、家庭科の改善

共立女子職業学校は、専門学部設置申請と同時に、大正13(1924)年11月29日付で、文部大臣に本科の修業年限、学科課程、毎週教授時数変更に関する認可申請を行い、翌14年3月認可され、4月から新制度への移行が始まった。それまでの甲部(修業年限3年)・乙部(修業年限2年)の区別をなくし、単に修業年限4年の本科とした。これにより、中等学校程度の実業学校に昇格し、4年制の高等女学校卒業生と同じく、中等学校教員検定受験の資格および専門学校入学の資格を与えられた。

専攻科(修業年限1年)も改善を行い、甲部・乙部に分け、内容をさらに強化した。大正14年10月、甲部卒業生には裁縫と手芸、乙部卒業生には裁縫の中等教員無試験検定の特典が与えられた。また、旧高等師範科の卒業生で、無試

験検定に不合格となった者が新制度の専攻科に入学し、1年修業することによって、卒業と同時に免許状が与えられることになった。

受験科も改善が行われ、受験科甲部（修業年限3年）、受験科乙部（修業年限2年）と名称変更し、教育内容も改正した。家庭科も学科目を増加して中等教員の資格を得る者の便宜をはかった。大正14年10月には受験科・家庭科を卒業して専攻科に入り、1年間修業した者には無試験検定により裁縫科、手芸科の中等教員免許状を授与されることになった。専攻科へは随時入学が許可されたので、卒業後も必要に応じて免許状が得られることになった。⁽⁹⁾

以上のような改正の結果、大正15（1926）年4月末日の生徒数は、本科421名、受験科甲部169名、受験科乙部292名、専攻科甲部19名、専攻科乙部75名、専門学部592名、家庭科629名、合計2,197名となり⁽¹⁰⁾、宮川前校長の「在校生を2,000名にしたい」という願いが叶ったのである。

注

- (1) 『共立女子学園百年史』278～283頁より
- (2) 『桜之友』第21号（『共立女子学園百年史』261・262頁より）
- (3) 『桜之友』第25号（『共立女子学園百年史』265・266頁より）
- (4) 『共立女子学園百三十年史』108頁
- (5) 『共立女子学園百三十年史』110頁
- (6) 『共立女子学園百三十年史』109・110頁より
「神辺靖光・長本裕子『百花繚乱 日本の女学校』女子教育史散策 大正・昭和初期編」520～524頁より、(7) 同書 327～330頁より、(8) 同書 506～520頁より
- (9) 『共立女子学園百三十年史』111～114頁より
- (10) 『共立女子学園百年史』325・326頁

参考文献

『学制百年史』、『学制百年史』資料編 文部省
『共立女子学園百年史』
『共立女子学園百三十年史』
神辺靖光・長本裕子『百花繚乱 日本の女学校』女子教育史散策 大正・昭和初期編 2025年刊行 成文堂

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(26):

『一目瞭然東京遊学学校案内』(大正11年)(2)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(慶應義塾大学非常勤講師)

今号は、前号に引き続き大明堂書店より刊行された『一目瞭然東京遊学学校案内』を見ていく。今号では、学校篇の「一五、外国語、国漢数、其他」に掲載された予備校を見ていくことにする。

現物では学校名の前に「□」を付けた上で大きめの文字で学校名が示されているが、本稿では「□」は付けず、フォントの変更もしていない。本稿では見やすさを保つべく学校の間は1行空けているが、現物も若干の空白がある。学校名の下にある括弧書きの住所と最寄駅は、現物では住所で1行、最寄駅で1行の分かち書きとなっているが、ここでは開いて記すことにする。

正則英語学校(東京市神田区錦町三丁目二番地 電車錦町下車)

目的 正則に英語を教授し完全に英語を活用するの士を養成す。

学科 (午前部)一予備科、普通科、受験科(午後部)一受験科、高等受験科、臨時受験科(夜学部)一予備科、普通科、受験科、文学科、教員養成科

入学期 毎学期の初(九月、一月、四月)とす、但し欠員あるときは臨時入学せしむ、七、八月には夏期講習会あり。

入学資格 品行方正にして満十二歳以上の男子たることを要す。

一正則予備学校は姉妹校にして同校入学に就ては入学金を要せず、両校兼修は中学の学力補修(ママ)となるべし一

国民英学会(東京市神田区錦町三丁目十九番地 電車錦町下車)

目的 専ら実用の英語と英文学とを教授す、入学期大体の規則は前者に同じ。

学科及修業期

初等科(午前並夜学)(チヨイスリーダー第一より第二迄の程度にして始
(ママ)めて英語を学ぶ者のために設く)(一学期間)

普通科(午前並夜学)(チヨイスリーダー第三、四巻の程度)(一学期間)

中学科(午前並夜学)(普通科と受験科の中間に位する程度)(一学期
間)

受験科(午前午後並夜学)(ユニオン第四リーダー又はチヨイス第五リー
ダー以上の程度)(二学期間)

高等受験科(午前並夜学)(「キヤラクター」又は「ゼ、ユース、オブ、ライフ」
の程度)(二学期間)

英文学科(夜学)(高等学校以上大学の程度)(四学期間)

会話専修科(夜学)(中学卒業生以上の学力を要す)(三学期間)

商業英語科(夜学)(中学卒業生以上の学力を要す)(一ヶ年)

普及英語学校(東京市神田区小川町一番地 電車小川町下車)

目的 最新式教授法により時代の要求に応ずる英語並に数学を責任を以
て最も短期間に完全に専修せしむ、入学期、前者に同じ。

学科

英語 初歩英語 ABC ヨリ中学三年程度迄(四ヶ月)
(午前及 中等英語中学三年程度ヨリ卒業迄(四ヶ月)
夜間) 試験英語 中学四、五年及卒業程度(四ヶ月)

数学 中学数学 初歩ヨリ中学四年程度迄(四ヶ月)
(午後) 試験数学 中学四五年及卒業程度(四ヶ月)
数学科は教材を無代配布す。

日進英語学校(東京市神田区仲猿楽町六番地 電車神保町下車)

目的 英語及数学を教授す、修学期各科共三ヶ月、入学期同前。

区分 英語部午前部。初等科一（中学一二年程度）、中等科一（中学三四年程度）、上級科一（中学上級及卒業程度）、午後部。特設初等科一（中学一二年程度）、特設受験科一（現に中学、高等予備校等に通学せる者の兼修に適す）夜間部。入門科一（ABC 程度）、初等科一（中学一二年程度）中等科一（中学三四年程度）高等科一（中学上級及卒業程度）

数学部 高等受験数学科一午後授業（現に中学高等予備校等に通学せる学生の兼修に適す）

研修英語学校（東京市神田区仲猿楽町十六 電車三崎町下車）

目的 英語を教授す、入学期其他前者に同じ。

学級 初等科、中等科、高等受験科の三種に分ち、各科共毎月初めに新設し三ヶ月を以て卒業せしむ。

欧文学院（東京市神田区錦町三丁目十番地 電車錦町下車）

目的 英語を教授するを目的とす。

修業期間 学級を初等科中等科高等科及別科とし、各科毎月新設四ヶ月を以て修了一年二ヶ月を以て全科を卒業せしむ。

程度 初等科一初学者及中学一、二年程度の補習及入学準備に適す、中等科一中学三、四年程度にして受験準備又は同程度の補習又は修学者に適す、高等科一諸官立学校入学受験準備及中学五年及卒業程度の補習又は修学者に適す。

英学専修学館（東京市神田区仲猿楽町十七番地 電車神保町下車）

目的 官、公、私立諸学校に入学準備の予備又は日課の補習を為す者其他業務の余暇を以て修学せんと欲する者の為に英語を個人的に教授す、入学期随時。

三田英語学校(東京市芝区三田四国町二番地 電車慶應前下車)

目的 英語数学を短日月間に完全に教授す。

学科 (英語普通科)一午前部、夜間部一ヶ年間に中学全科の英語を授く、
(英語受験科)一午前授業、(英語補習科)一夜間授業、各三ヶ月、
中学校卒業程度の者に適す、(英語高等科)一夜学中学校卒業程
度の英語力ある者を入学せしむ、修業年限二ヶ年(数学科)一夜学
六ヶ月中学全科の数学を授く。

入学期 学年は一月、四月、七月、十月開始、欠員あるときは臨時入学
するを得。

入学資格 満十二年以上の男子

独逸学館(東京市神田区西小川町二丁目九番地 電車三崎町下車)

目的 独逸語を教授す。

学科 高等受験科、普通(夜学)科、医書科、日曜独逸文法科に分る。

私立正則予備学校(東京市神田区錦町三丁目二番地 電車錦町下車)

目的 高等及び中等の普通学科中主として数学、物理化学、国語漢文、地
理歴史、博物及び図画等を正則に且つ速成に教授す

学級 午前部一高等予備科、初等数理化予備科、中学科

午後部一正則補習科、数理化予備科、中学科、初等数学科

夜学部一初等数学科、中等数学科、物理化学部

臨時部一臨時受験科、夏期講習会

入学期 每学期始め(九月、一月、四月)とす、但し欠員あるときは臨時入
学せしむ。

入学資格 品行方正にして義務教育を了へたる満十二年以上の男子。

研数学館（東京市神田区仲猿楽町 電車三崎町下車）

目的 数学を教授す。

学級 初等科、中等科、高等受験科の三科に分ち、各科は毎月初めに新設し各三ヶ月を以て卒業せしむ。

英学専修学館の後ろに、「以上は神田附近に就き選択に自由なり」と書かれている。

研数学館の後ろには、「其の他の数学の学校いろいろ」として普及英語学校数学部、日進英語学校数学部、三田英語学校数学部が掲げられ、それぞれの学校の箇所を参照するよう指示されている。

次号では、第三篇の「十六、高等予備校と予備校」に掲載された予備校の情報を見ていく。

『嘉納治五郎』(1964年)を読む(10)

嘉納塾における嘉納治五郎(その5)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

「『嘉納治五郎』(1964年)を読む 嘉納塾における嘉納治五郎」と題した小シリーズの5回目として、本号では、塾内で手書き回覧雑誌の『気帥』が作られていたことを述べる。

第137号(2026年5月15日)では、嘉納塾では、厳格な教育方針がとられていたと同時に、茶話会などの交流行事が盛んに行われていたことを紹介したが、回覧雑誌『気帥』は、塾内の交流活動の一環であったと思われる。

『気帥』の概要

『嘉納治五郎』(1964年)の135ページに『気帥』についての説明がある。これによれば、『気帥』は1895年(明治28)4月の第1号から、1914年(大正3)年の第79号が現存している。塾生が書いた半紙50枚から100枚ほどの墨書き原稿を袋綴じした1冊限りの雑誌で、これを塾内で回覧していた。編集は塾生が交替で担当していたという。

雑誌名の「気帥」は、孟子の「志は気の帥なり」から採ったという。帥は、先頭に立って行動を率いる、指揮するといった意味なので、例えば「この雑誌を通して一人一人が見つけた志が気力を奮い起こす基になり、立派な行動につながっていく」というような願いが込められていたと考えることができるだろう。

内容は、嘉納治五郎の教えの筆記とともに、詩、随想、書評、洋書の翻訳、旅行記、塾内人物の人物評と多彩であったという。

回覧雑誌というもの

明治・大正期に流行した回覧雑誌は、例えば「会員の作品をとじ合わせて雑誌の形にし、順々にまわし読みするもの」（Webサービスコトバンク収録の小学館『デジタル大辞林』）といったように説明される。

私は、以前、卒業論文で明治末期から大正初めの時期に京都帝国大学の寄宿舍で作られていた回覧雑誌（現在は、京都大学の大学文書館に所蔵されている）を熟読したことがある。その当時の京都帝大寄宿舍の舎生たちは、総長木下広次の期待に応えて「学内の模範的切磋団体」を標榜して、総代会などの自治活動とともに、茶話会、遠足などの交流活動を盛んに実施していた。それとともに、手書きの回覧雑誌を年に何号も作っていた。それぞれが自由に書いているのだが、旅行記、随筆のように混じって檄文のような原稿も時折見られ、寄宿舍生同士で切磋琢磨しようとしていた雰囲気を読み取ることができた。

嘉納塾で作られた『『気帥』の内容からも、切磋琢磨の雰囲気を読み取ることができるのかもしれない。以前、講道館を訪問したときに、この『気帥』の記事目録を少し見せていただいたことがある。コピーはとっていないが、漢文調の題名が多かった記憶がある。閲覧するためには事前申請と審査が必要なので、いずれまた訪問して塾生の肉筆原稿を読みたいと思う。

次号では、嘉納塾が、もっとも重視していたことの 하나가、身体的訓練であったことを紹介したい。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2026年2月15日改訂)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (著作権の許諾確認) 記事のなかで用いた写真画像などに著作権が生ずる際には、著作元または所蔵先に執筆者が許諾の確認を行ってください。それが大学等の出版刊行物ならば、当該大学の事務部または資料館等の施設に照会し、適切な対応をはかってください。確認がとれたものを用いることとして、確認がむずかしいものについては、写真画像の掲載を差し控える必要があります。
8. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
9. (レイアウト等) 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
10. (web公開) ニュースレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
11. (研究交流会) ニュースレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
12. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

先日、学生時代から愛用している腕時計 G-SHOCK の最新である GA-V01 型を、いまの私にとっては比較的到手な価格帯ということもありネットで購入した。開発担当デザイナーの濱上朋宙によれば、G-SHOCK 自体がもつ歴史やスピリッツ（落としても壊れないタフネス、ネバーギブアップの精神）は底流に継承しながら、斬新に挑戦し完全な新型モデル（球面ガラスを守るインデックスバンパーをアイコンとする）を目指したといいます。担当の濱上いわく、G-SHOCK が「何十年も続くブランドであっても、今の現地の雰囲気や新しいニーズをちゃんと汲み、それをベースに自分たちの“オリジナリティ”を発信する」ことを第一としたとのこと（カシオ計算機株式会社「G-SHOCK『GA-V01』誕生について」『DESIGN STORIES』2025 年 5 月 29 日）。

実際に、日本国内だけでなく、アジアや欧米市場を購買ターゲットにしかと定め、現代若者層の趣向調査も重ねながら、「若い世代は、腕時計をわざわざつけない。時計をつけるという行為には、ブランドが好きだったり、個性を表現するようなフックがないと、愛着を持ってもらえない」とし、「時間を見るだけのプロダクトではなく、それ以上に身につけたい価値、ブランドに対する愛着を感じて」ほしいと考えて、新型 G-SHOCK を開発したそうです（小学館「奇抜デザインの『GA-V01』G-SHOCK のものづくり」『@DIME』2025 年 9 月 18 日）。そんな開発担当者のあつい思いを知って想像してしまうと、自分ももつ愛用の時計が、なんだかよりいっそう愛おしく感じてしまいますね。（谷本）

通勤途中に雑誌『ビッグイシュー』を購入することがよくある。この雑誌の 528 号（2026 年 6 月 1 日号）の特集の「紙とデジタルを使い分ける」で、柴田博仁氏（群馬大学情報科学研究科教授）の研究が紹介されていた。柴田氏はソフトウェアの開発で博士号を取ったあと、富士ゼロックスに就職してデジタルメディアと紙の比較研究をおこなっている。

柴田氏が最近おこなった研究の一つが、自らが被験者となって 14 ヶ月間、紙の本を一切読まずデジタル機器を使った読書だけで日常生活を過ごすという実証実験であった。まず、職場に置いていた 1000 冊以上の自分の本のうち必要だと判断して裁断・PDF 化した 249 冊以外を処分したという。そして PDF 化した書籍を電子ペーパー端末で読み、それ以外の読書は、Amazon の kindle で電子書籍を購入して、Kindle 専用端末で読書する生活を続けたという。そして、14 ヶ月のデジタルだけの読書生活の実験を終えたあと、今度は 16 ヶ月間、紙での読書を解禁した。そして、どちらの期間も、読書生活に関連して気づいたことを「読書日誌」に記録し、それを後日分析して、デジタルでの読書生活と紙での読書生活を比較したという。そこから得られた知見も記事のなかで簡単に紹介され

ていた。想像通りの内容もあったが、「紙の本にした途端、参照する作業が一気にはかどりました。私が考える紙の一番の利便性は「ページ間の行き来がしやすいこと」という柴田氏の指摘は、「デジタルのほうが、ハイパーリンクを使えばジャンプしやすいのではない」という私の想像とは異なるもので、新鮮だった。

数値データでの分析を中心に研究してきた研究者が、日常生活のなかで自らが被験者になって質的な分析をおこなうというのは、大変興味深い。「私も何か試してみたいな」と興味がわいた。(福岡)

会員消息

今年の6月中に、関東圏にもなんとか台風が襲来し、私がつとめる本務先や非常勤先の大学でも通勤・通学の自粛要請が出される動きとなりました。6月3日の台風襲来時には、非常勤の八王子・S大学での戦後日本教育史を、ズーム授業（リアルタイム）で実施しました。コロナ禍などにはズームもよく使用していたのですが、それ以降OSの変更もあって使用PCを買い替えた際に、ズームをなんとインストールすらしていませんでした。笑。今回の授業前になって、なんだか慌ててインストールするやら、講義での長時間使用の設定手続き等を行うやらと。なおS大学は、台風進路を早めに執行部で判断し、襲来の1～2日前にはズーム授業（リアルタイム）実施の要請がありましたので、それでも時間的なゆとりが少しあって助かりました。さらにS大学では、ズーム授業でも通常の対面授業と同じく、受講学生の遅刻や出欠の有無について、ズームサイト入退出の時間管理も速やかに記録反映がなされ、ちょっとひえーと驚きました。夏から秋にかけて、これから予期される台風襲来の大学の対応については、やはり迅速で明確な指示が、学生や教職員らにきちんとなされたほうが望ましいと実感しました。(谷本)

ゆっくりと書き進めていた院生生活コラムもようやく最終回となりました。もはや記憶も曖昧な中でありましたが、今しか書けないと思い、なんとか書き上げることができました。執筆の中で少し調べてみるだけでも、院生向けの支援制度は目まぐるしく入れ替わっており、このコラムに書いてあることさえ、もはや時代遅れの感もありますが、少し前の、一研究室の雰囲気映すものとしてご覧ください。(猪股)

学生たちと福澤諭吉の『福翁自伝』を読み進めています。福澤諭吉が創った大学は？「トーダイ…!」と答えていた学生たちも、『福翁自伝』の面白さに興味をもったようです。読まず嫌いの読書の楽しさを伝えることも大切ですね。(山本)

古文書は、ほとんど読めませんが、手書き史料を利用する際「何とかしてもう少し読めるようになりたい」と思って少し勉強しては中断する、ということを繰り返しています。そのため先日、電車の広告で大和文華館（奈良市）で「古文書の魅力 没後50年 中村直勝と双柏文庫」という展示がおこなわれていることを知り、中村直勝が日本中世史の大家であったことも知らずに、見に行きました。その結果、「行って正解だった」と感じました。

古文書を解読する力がない観覧者にとっても、中村直勝が研究人生のなかでどれほど古文書との出会いを大切にしていたかが、きめ細かいキャプションを通して伝わってきたからです。例えば、「古文書を生かしたい。古文書から声を出させたい」と強く願った中村が、「毎夜三通の古文書を選んで自宅の床の間にかけ、声を出して朗読することを日課」にしていたことが記されたキャプションがありました。

「好き」は学問の大きなエネルギーになることを改めて感じ、私も素直に「好き」を研究のエネルギーにしてもよいのかもしれない、と思いました。今年の4月～9月初めまでの貴重な「研究休暇」の約半分が過ぎましたが、気軽に調査に行けて楽しく過ごせているので、まずは良かったと思っています。

大学生協で勤務された宮村さんと知り合うことがあり、〴〵学生生活支援の鍵は、学生間のコミュニケーションの促進だ、という旨のお話を聞けて興味をもったので、コラム執筆をお願いしたところ、快く執筆してくださいました。近年の余裕を失いつつある大学のなかで、やはり大切な意見だと思いました。

京都市学校歴史博物館で、6月27 日から9月27 日の期間、「奥深き『学校博物館』の世界」というテーマの展示がおこなわれます。また、8月1日および2日には、この展示に関連したシンポジウム「学校資料の活用を考えるⅢ—学校博物館・デジタル化—」が開催されます（同館ホームページから事前申し込みが必要。先着順）。詳細は、次ページのチラシでご確認ください。（富岡）

本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5 サイズの小冊子を作ることができます。

企画展

奥深き

あなたの通った学校に
「郷土資料室」はありましたか？

「学校博物館」の世界

全国の学校博物館も
紹介するよ！



馬形埴輪模型 桃薫校 年代不詳

令和8(2026)年

6月27日(土)

～9月27日(日)

前期 6月27日～8月17日

後期 8月21日～9月27日

開館時間 9時～17時

(入館は16時30分まで)

休館日 水曜日(祝日の場合は翌平日)

入館料 大人400(320)円
小・中・高生150(120)円
※()は20名以上の団体料金
※京都市内の小・中学生は土曜日・日曜日入館無料



京都市学校歴史博物館

Kyoto Municipal Museum of School History



紹介を予定している学校博物館の一例 (各期五十音順。予定の変更によって別の期に取り上げること、及び紹介を取りやめることもありますので、ご了承ください。)

〔前期〕

- ・短鸞小学校郷土室(京都市)
- ・伏見板橋小学校郷土資料室「いたはくら」(京都市)
- ・間門小学校附属水族館(まかどシーマリンパーク)(横浜市)
- ・泰阜小学校泰阜村立学校美術館(長野県泰阜村)

など

〔後期〕

- ・岩倉北小学校「岩倉ふるさと館」(京都市)
- ・光明小学校「郷土・本田資料室」(浜松市)
- ・正親小学校正親歴史資料館「追憶の部屋」(京都市)
- ・博労小学校ばくろう思い出館(高岡市)

など

ここに挙げたのは展示で紹介するほんの一部です。企画展ではさらに数多くの学校博物館が登場します

関連イベント

○シンポジウム

学校資料の活用を考えるⅢ
—学校博物館・デジタル化—

日 程: 8月1日(土)~8月2日(日)

会 場: 当館 2階 講堂

参加費: 無料

定 員: 100名(要予約・先着順)

- ①イベント名、②参加代表者氏名(ふりがな)、
③代表者の電話番号、④参加希望人数(4名まで)を明
記のうえ、電話・FAX・Eメールのいずれかでお申込み
ください。

詳細は



電話 075-344-1305

FAX 075-344-1327

Eメール rekihakku-jigyou@edu.city.kyoto.jp



兵士埴輪模写
桃園校 年代不詳



方位磁針
稚松校 年代不詳

みなさんの通った学校に、「郷土資料室」などと名付
けられた。昔の生活道具や美術工芸品などが集められ
ている部屋がありませんでしたか？
実を言うとこの部屋、近年「学校博物館」として見直
しが進められていて、しかもかつては、日本全体の博物
館のうちのなんと約4割を占めた、歴史的にもとても
重要な施設でした。また、時代が令和へと移り変わっ
た現在でも、全国や世界には大変ユニークな学校博物
館が多数存在していて、この場所で地域の人たちが児
童と交流するなど、地域と学校の絆を深める大切な空
間になっている学校博物館もあるのです。
そんな注目すべき学校博物館の歴史や現状、そして
その奥深き魅力の数々を紹介するのが、本企画展「奥
深き「学校博物館」の世界」です。



風俗人形(平安時代)
年代不詳

文部省著作教科書「中学三年生用
社会科13 文化遺産」(勝田守一執筆)
昭和24(1949)年



洗濯板 格致校
年代不詳

奥深き 「学校博物館」 の世界



当館内「開智資料室」
(3Dイメージ)

- 阪 急…京都河原町駅 徒歩約10分 10番出口「藤井大丸口」から南西へ
京 阪…祇園四条駅 徒歩約15分 3番出口から南西へ
地下鉄…烏丸線四条駅 徒歩約12分 5番出口から東へ
市バス…四条河原町 徒歩約10分 南西へ
市バス…河原町松原 徒歩約5分 北西へ

駐車場はありませんので、
公共交通機関をご利用ください。



京都市学校歴史博物館
Kyoto Municipal Museum of School History

〒600-8044 京都市下京区御幸町通仏光寺下る横町437 TEL.075-344-1305

9時~17時(入館は16時30分まで) ※水曜休館
●この印刷物が不要になれば、「雑がみ」として古紙回収へ

学校歴史博物館 Q



※正門(御幸町通側)からお入りください